

満州

北斗七星輝く下で

愛媛県 松田 馨

昭和十四年徴兵検査の前日、町役場兵事課より呼び出しがあり、出頭しました。課長より「貴君は明日徴兵検査の席上、全員参列の前で松山連隊司令官より表彰状を受けるからそのつもりで行け」と言われました。理由は青年学校を無欠席で成績が最優秀とのことでした。当時としては非常に名誉なことでした。

検査は甲種合格でした。家族親族友人に祝福され、私としては慶びの頂点でした。

翌十五年二月十日、徳島歩兵第四十三連隊に現役入

隊しました。愛媛県から徳島連隊への入隊は、私たちが初めてなので同県人の二年兵や古参兵は一人もいません。伊予と阿波では言葉に少し差異がありますから、よくからかわれて苦労しました。

一週間ほど第四十三連隊で軍人について基本を教えられての出動でした。「貴様等は北満で現地教育だ。モタモタしていたら死んでしまうぞ、覚悟して行け」と古参兵の励ましの活を入れられて坂出港を出航しました。軍船の中は狭くて、三段か四段に仕切られ蚕子棚のようでした。寒風凄まじく玄界灘の荒波の中、船は大きく上下左右に翻弄されながら無事朝鮮の羅津港に入港し、全員上陸しヤレヤレと思いました。

大陸鉄道の列車に乗せられ少し走った時に「ここから満州だ」といわれて鮮満国境図們を通過しました。

翌日一望千里の広漠たる雪の大平原を眺めて、初めて満州に來たのだと痛感しました。目的地虎林第七百十二部隊に到着し、中隊長は張間中尉、小隊長は砲井少尉です。

中隊長の訓示があり

「諸君は只今から本職の部下として、天皇陛下の臣として、また故郷の肉親はじめ郷土の名誉のためにも一所懸命に頑張ってください。戦友道を完うし、先輩について充分学び、一日も早く帝国軍人として立派に働いてくれ」。

今現在に至るも、その時の方が脳裏に明瞭にあります。その日は赤飯が出てお客様扱いでした。

翌朝、起床喇叭で飛び起きると同時に「コラ、初年兵がポヤポヤするな」と古年兵の大雷鳴が落ちました。

教育開始。教官砲井少尉、助教小笠伍長、助手中村・戸花兩上等兵です。虎林の外気温度は零下三十度が平常です。寒波襲來時には零下四・五十度にもなるそうです。基本訓練、各個演習、戦闘訓練はとくに厳しく、古参兵の中には支那事変や対ソ連とのノモンハン事変

に参戦した猛者もいて、よくビンタ（殴る）を取られました。

初年兵は朝の起床から夜の消灯喇叭が鳴るまでは一分一秒の自由もなく、その上に特別勤務があります。小隊長や班長の当番、中隊事務室や炊事、飯あげ当番があります。三度の食事を炊事場へ週番上等兵の引率で受け取りに行きます。片道五百メートルもありますから、少しでも早く持ち帰って温かい食べ物をみんなに食わそうと早駆けで運びました。将校、下士官、古兵、新兵と全員食事が終って、食函返納で炊事場へ早駆けで往復し、帰ると全員軍装を整えて演習に出発すべく整列しています。慌てて軍装を整え一番後列に加わりました。

練兵演習場の中心に宮本山があり（顎出し山）、四方に開けた広野での戦闘訓練には最適の場所でした。基本的には各個教練から始まり戦闘訓練です。早駆け、匍匐、射撃、突撃等毎日毎日猛訓練が続きました。もちろん演習場と兵營の往復は駆け足で、軍歌を力一杯歌って行進しました。早駆けは四・五千メートルぐら

いやり、匍匐訓練は敵前での行動で一番重要で、第三匍匐は頭と背中と尻を低くして、両膝と両肘で前進するので。両腕に銃を捧げ、銃口に泥が付かぬようにして一千メートルぐらいを一所懸命に進むのです。左手は少し浮かし、右手は手の甲が地面につきまます。終つて見ると右手は皮が破れて鮮血が流れていました。

また、瓦斯訓練では防毒面を一日中着用して行動しました。その間、食事も水も口にせず「瓦斯ナシ」の号令の出るまででした。陣地構築で蝸壺掘り、携帯用小形スコップで直径五十センチ深さ一メートルを各人競争で、何度も何度もやりました。すべて一人前の兵隊になり、戦闘に強く勝ち残る教育です。

一期の検閲が終り一等兵に進級しました。引続き上等兵候補者教育が始まり、学科問題に取り組みました。頑張った甲斐あって十一カ月で先発上等兵になり、「これで一人前の兵隊だ」と嬉しく思いました。

昭和十六年一月、饒河県饒河警備のため中隊に出動命令が出ました。饒河はウスリ河を境にした国境の町です。川巾四百メートルぐらいで中心線が国境です。

私たちは完全軍装で虎頭まで鉄道で、その先は徒歩行進です。一番寒い時期です。雪も深く膝から股まであります。力一杯足を前に踏み出しても僅か二十七センチほどしか前進しません。自分の吐息で防寒帽子の毛は真白に氷が付き、眉毛も鼻毛も凍って、常時動かさぬと凍結しそうでした。寒いのでなく痛かったのです。タマベラカンという村に到着(朝鮮人農業移住村)、一日親切にお世話して頂き、嬉しい思い出でした。十日ほど行進して饒河に到着しました。

兵舎は藁葺屋根で虎林の甲編制兵舎のような赤煉瓦建造とは比較になりません。でも住めば都です。我が隊の兵力は兵員四百人、火器は大隊砲二門、重機関銃二機です。対岸のソ連軍は一個師団駐留しているとか。万一戦闘になった時は一瞬にして玉砕だったと思います。戦力の大小でなく、ここの第一線が満州のため、延いては日本の大事な防衛線です。

とくに衛兵(分哨)勤務は大変でした。地形を利用して哨舎を半地下で構築し、空からも対岸からもカムフラージュしました。歩哨も昼間は良いけれど夜間と

もなれば大変だった。風上は音を早く聞いて処置出来ましたが、風下の場合は視力が頼りです。吹雪の深夜は本当に氣を使いました。大地は堅く凍りシベリヤ風は冷る。じっとしてたら全身凍傷になります。一所懸命に足踏みをして暖を取りました。そうした時、空には北極星が青白く輝き、手を差し伸ばせば取れるようなところに北斗七星が宝石のように煌めいていた。

故郷の伊予では、今ごろ親兄弟はどうしているのかな、と少し感傷的な気持ちになったりした。ここ饒河の水はきれいなので、皆生水を飲みました。途端に赤痢が蔓延しまして、一度に四十人も倒れ、同年兵の野本君が逝去されました。戦友だから屍衛兵を志願し、一夜亡骸に付き添っていました。言葉に出来ぬ淋しさを感じました。それからは全員朝水筒に一本お茶を入れ、一日をそれだけで約二ヵ月過ごしました。以来、生水は絶対口にしませんでした。

この地で一カ年経過して、次は都木河方面防衛で中隊が移動しました。途中の中頃にムワというところがあり(糧秣等の収集地)そこに一個分隊が残り、他主

力は都木河に行きました。私はムワにあつて二・三日間隔で米、麦、味噌、醤油等約三十キロを背負つて、片道二十キロの道を運びました。その後、都木河の本隊に合流しました。ここの兵舎は穴倉式で、地上に少し屋根が出ていただけで、舎内は昼でも薄暗かった。

十二月八日大東亞戦争勃発はこの穴倉で知らされた。

十七年二月、現役兵が入隊して来ました。私は二度目の教育係を命ぜられ、教官松本少尉は陸軍士官学校出身のバリバリの軍人で志気旺盛でした。毎日あの「額出し山」を中心に広い広野を駆け巡り指導しました。そのころ、関東軍百万人の大動員発令があり、十六年七・八月に関東軍特別大演習(関特演)がありました。本演習は実戦さながらであった。犠牲者も大勢出たとのことでした。大本営も対ソ連戦闘必至と説かれたのでしようか。

また、地区、地域的演習は片仮名記号の作戦が多く、中でも「ナ号」「ワ号」等の演習は大掛りでした。夏季の昼間は三十余度の熱砂の中を走り、また湿地の中を這い廻り、夜は寒いぐらい冷え込んだこと、冬季は

銃剣が凍り、一寸皮膚に接すると火傷のごとく皮がめくれました。その他労苦を思い起こせば尽きません。

七月に兵長に進級し、三十歳前後の老いた補充兵が入隊して来ました。私は三度目の教育係を命ぜられ、老初年兵教育に心血を注ぎ、行動が鈍いので指導には一層の苦勞が必要でした。全員が真面目で、よく訓練に応えて立派な軍人になりました。私も三年余り頑張った甲斐あって下士官適任證を附与され、満期除隊の命を受け、四月十五日虎林を後にしました。

釜山にて乗船し、下関に上陸し、久方振りに見る日本の風景、とくに山河は美しいと感じながら、一瞬ボーとしました。徳島連隊へ帰隊後、一週間して懐かしの我が家へ帰りました。先祖へ報告しようと仏壇を見ると新しい位牌が一基あり、背中より兄が「先月祖母が身罷ったが、お前に知らせて軍務に支障があつてはな」とのことでした。残念でした。

役場や学校に挨拶に行きましたら、明日からでも御荘青年学校の指導員としてやってくれと依頼され、続いて在郷軍人の教育訓練の主任を拝命し、消防団・婦

人会等の指導に当りました。

かくして昭和二十年三月、再度召集を受け、高知第三百五十三連隊へ入隊、新設部隊です。私は伍長に任官し、分隊長を拝命、部隊編成が行なわれ、軍旗を連隊長が宮中にて拝受しました。でも武器は全員に行き渡らず三人に一銃でした。食器等も満足になく、竹製品等で代用してました。主食も少量の米と麦、芋、豆、雑食でした。

外地をしたので内地防衛に全力を注ぎ、万一敵が上陸すれば、全員玉碎覚悟で訓練をしました。宿毛方面に散開して蝟壺掘りに懸命でした。八月十五日、本部より大至急全員帰営命令があり、取るものも取りあえず一目散に帰隊し、正午全員整列し、天皇陛下の終戦の御詔勅をラジオを通して拝し、鉄槌で頭を打たれたごとく、また胸には熱いものが突き上げてきました。

涙が自然に頬を伝わっていた。崩折れて土下座し大声で哭き、怒号を発する者あり、言葉にできぬ情景でした。

八月末、部隊解散。私は陸軍軍曹で残務整理後、十

二月三十一日大晦日に懐かしの我が家へ帰った。亡き戦友に合掌。

大東亜戦争従軍記（医は仁術）

香川県 吉田厚雄

私は吉田厚雄（旧姓松本）です。昭和十六年度徴集です。当初、昭和十三年五月二日、国策に依って満州開拓青年義勇隊に参加、茨城県内原訓練所入所。その後、満州国三江省、東安省等において、地域警備に従事。昭和十六年七月十日、東安省東安で徴兵検査、甲種合格。昭和十七年一月十日、香川県丸龜歩兵第十二連隊留守隊へ現役兵として入営。昭和十七年三月二十日、満州派遣のため坂出港より乗船。釜山上陸。列車輸送により満州国東安省虎林県宝東に駐屯する。満州

第九百三十六部隊に編入（昭和十七年四月五日）。翌日の四月六日第八中隊付の衛生兵となりました。正式には第十一師団歩兵第十二連隊第二大隊、第八中隊付

である。

宝東陸軍病院で教育。九月までの間に、一期、二期、三期の検閲を受け、連隊医務室勤務となりました。昭和十八年頃にはほとんど管内にはおりません。野営の演習ばかりでした。

昭和十八年七月、完達山脈地方匪賊討伐に参加。これは満軍の反乱でして、彼等は状況により満軍から匪賊や馬賊に変わります。この討伐は戦闘行動はあまりなく、日本軍が行くと相手は逃げ、日本軍が引き返すと相手は出て来るといふ状態で、まるで飯の上の蠅を追うようなもので、実に五月蠅い状況でした。

この討伐は軍医一、衛生下士官一、衛生兵一を含む完全一個小隊で編成され、行動区域は湿地帯が多くて、橋の無い処では泳ぐようにして移動し、毎日雨は降るし、山の稜線で幕舎を張って凌ぎました。天幕を谷間や低い処へ設けると、上から敵に狙い撃ちされて、全滅した例が数多いからです。

食糧も欠乏して来て、山の中のことだから自生のキノコを採って来て食べたところ、全員下痢、発熱とな